

# Nara Women's University

都市「中流住宅」における生活者の住居観と住生活  
改善

-大正期を中心とするデモクラシー期の「婦人之友」  
誌の分析をとおして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 久保加津代 公開日: 2012-05-17 キーワード (Ja): デモクラシー, 住居, 住生活, 住宅, 女子教育, 生活, 大正, 婦人之友 キーワード (En): 作成者: 久保,加津代 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/2997">http://hdl.handle.net/10935/2997</a>

## 第8章 結 章

大正期を中心とするデモクラシー期の『婦人之友』誌読者層が求めた住生活改善の特徴は大きくつぎの3点にまとめることができる。

第1点は、洋風住宅へのあこがれである。

第2点は、家事労働の能率化・合理化を求めていることである。

そして第3点は、何よりも家族の日常生活がより快適におこなわれるように腐心していることである。なかでも、この家族の日常生活を大切にするという考え方が、『婦人之友』誌読者の大きなねがいであった。西山卯三の指摘するように、上流を望む姿勢も強かったにちがいないが、それ以上に家族の日常生活を快適なものにしようという気持ちは強かった。もちろんこの時代には、家父長的なイエ制度は厳然として存在していたのであり、夫婦も対等平等であったわけでもないし、民主的な家族関係が確立していたわけでもない。あくまでもその枠のなかではあるが、それまでの専制君主的な夫と絶対服従の妻、近寄り難い父親の姿ではなく、夫婦は仲睦まじく、親子は「打ち寄って談笑」するような、明るく朗らかな家庭像を求めているのであり、それぞれの立場のなかで、とりわけ「主婦」と子どもとが精いっぱい主体的に自治的に生活する家庭像を求めているのである。

家族の日常生活を快適なものにするために、『婦人之友』誌読者が具体的に求めた住生活改善の視点は、①家族本位志向とオリエンテーションの問題、②家族の日常生活空間と接客空間の分離の問題、③起居様式の問題 に大別できる。

それぞれの問題についての分析結果をまとめておく。

### 1. 家族本位志向とオリエンテーション

1. 『婦人之友』誌読者の日照に関する意識は高く、専門家による衛生的な提唱を積極的に受けとめている。
2. 大正時代のなかば以降、家族だんらんが提唱されるなかで、食事空間のだんらん空間化を進め、それと同時に南面化を進めている。
3. 私室空間、台所など、家族の日常生活空間の南面化をすすめている。一部ではあるが、接客空間を北面にとるものもでてくる。

『婦人之友』誌読者にとって、だんらん空間、私室空間、台所など、家族の日常生活空

間に関する日照の要求は切実なものであった。「洪水のやふに日光を導く」(1922.11.P 109)という表現もみられ、日照への強いあこがれがわかる。『婦人之友』誌読者が設計した住宅の平面図には、家族の日常生活空間に日照が得られるように、①縁側を多用したり②軸を45度振ったり、あるいは③二階建てにしたりと、工夫をしている。さらに、一部ではあるが接客空間を北面にとったものもみられる。格式尊重や接客重視の考え方が強かった時代に、家族の日常生活空間を南面させ、接客空間を北面にとるという『婦人之友』誌読者の積極的な姿勢があきらかになった。

## 2. 家族の日常生活空間と接客空間の分離

1. 『婦人之友』誌読者の、通り抜けを廃して部屋の独立性を求めるという要望は強いが、家族員個々人のプライバシー確立の要望はみられない。
2. むしろ『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図には、家族の日常生活空間と接客空間を分離しようとしたものが多い。「公（家族共用の空間＋接客空間）と私（私室空間）の分離」というよりは、「ソト（客＋使用人）とウチ（家族）の分離」を望んでいたことがわかる。
3. しかし、それは客への体面を最も重視してというのではなく、家族員以外のものから家族の生活を守るという考え方のあらわれである。

接客空間を玄関脇に設けて、玄関の扱いに工夫をして、家族の日常生活空間と接客空間を分離しようとしたことは、一定の客が家族の日常生活空間へ入ることを避けようとしたものであり、家族員以外のものから家族の生活を守ろうとしたものである。『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図には、複数の接客空間をもつものは3例しかみられず、北面の接客空間もある。二の間・三の間などの座敷前室を備えた接客本位の住宅と比べると、接客空間は面積的にも縮小されている。これらのことから考えても、この時代には客への体面を何よりも重視してというのではなく、家族の生活を大切にしようという考え方から家族の日常生活空間と接客空間を分離しようとしたことがわかる。

## 3. 起居様式

1. 建築の専門家の記述では、すくなくとも大正時代中期までは和洋折衷住宅よりも純粹

な洋風住宅をよしとするものが多い。

2. 『婦人之友』誌読者の記述には洋風住宅へのあこがれがみられるが、同時に性急な洋風化への躊躇もある。接客空間には積極的に洋風をとり入れているが、だんらん空間や私室空間には和室も望んでいる。

3. 明治時代のおわりから大正時代のはじめまでは、『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図には<和室住宅>が、専門家の設計した住宅の平面図には<洋室住宅>が多かったが、大正時代の中期ごろからはどちらも<混在住宅>が多くなる。

洋風化を進めようとする専門家の提案に対して、『婦人之友』誌読者の方は現実の生活に柔軟に対応しようとしている。洋風住宅にあこがれ、接客空間には好んでこれを取り入れるが、だんらん空間や私室空間・予備室などには和室も志向するという『婦人之友』誌読者の現実的な対応が、専門家の設計にも影響をおよぼしていった。

これらのことから、「ありたき」住宅様式として存在していた「居間中心型」住宅様式がそのままのかたちでは定着せず、昭和時代に入って「中廊下型」住宅様式を基本にした融合型の住宅様式が定着していった理由について考察する。

木村徳國は、「居間中心型」住宅様式と「中廊下型」住宅様式の普及にともなう「様式の弛緩」によって、「居間中心型」住宅様式と「中廊下型」住宅様式とが融合するのは、両住宅様式の社会的発展であると説明しているが、大正期を中心とするデモクラシー期の『婦人之友』誌に掲載された住宅平面図や住生活関連記事を分析した結果、「居間中心型」住宅様式は、当時の都市「中流」階層の人々の生活実態や住要求にそったものではなかったもので、受け入れられにくかったということがあきらかになった。

具体的には、建築の専門家が提唱した「居間中心型」住宅様式の、各室の起居様式の問題やオリエンテーションの問題、家族の日常生活空間と接客空間の分離の問題などが、当時の都市「中流」階層の人々の日常生活の実態や住要求にそったものではなかったもので、受け入れられにくく、「居間中心型」住宅様式がそのままのかたちでは定着せず、「中廊下型」住宅様式を基本にした融合型の住宅様式が定着していったものである。

まず、椅子式の導入の問題についての建築の専門家と『婦人之友』誌読者との考え方の違いをみると、つぎのとおりである。

建築の専門家は椅子式の導入には、ことに積極的だったようである。

建築学会は、1903(明治36)年に講演会を開いて、日本の家屋を改良するには専門家が寄っ

て椅子式の標準住宅を開発し、国民を引っ張って坐式の習慣を改めさせなければならないとして、具体的な方法について議論し、その過程を建築雑誌に掲載している。

また、同じく建築学会が、1922(大正11)年の「平和記念東京博覧會」に実用的簡易住宅14棟の実物展示をおこなった「文化村」の出品要項にも、居間・客間・食堂は必ず椅子式に、ということがうたわれている。

さらに、第一次世界大戦後の生活困難が社会問題になってきたので、これを家庭生活の合理化運動によって立てなおそうとして、1920(大正9)年に設立された、文部省の外郭団体「生活改善同盟會」も椅子式を提唱し、具体的な指導をしている。

『婦人之友』誌でも、建築の専門家は椅子式の部屋の多い洋風の郊外型一戸建住宅をたくさん提案しており、啓蒙的な記事のなかにも、ただちに、生活全体を洋風化することがよいという論調のものが多い。

これに対して、『婦人之友』誌読者の方も洋風の郊外型一戸建住宅へのあこがれは強かったようではあるが、ただちに、生活全体を洋風にしてしまうことにはためらいがみられ、接客室には洋室を、家族のだんらん空間には和室をという具合に、部屋の用途によって洋室と和室とを選び分けている。洋風へのあこがれを接客空間に体现して、家族の日常生活には現実的に対応しようとしたものと考えられる。

住宅全体の広さや家具の購入代金の問題、部屋の融通性や転用性の問題なども絡んでいたと思われるが、雨戸を廃して窓ガラスをとりいれたり、台所の改善などに関しての『婦人之友』誌読者の熱心な対応の姿勢をみると、必ずしも消極的なためらいではなく、家族だんらんの空間としては和室が使いやすい、私室であっても「子供室」には洋室がよいが、「老人室」や「寝室」には和室が使いやすいという毎日の生活のなかからの実感を率直に表現したものだと考えられる。

また、だんらん空間や接客空間の考え方やとり方にも、建築の専門家と『婦人之友』誌読者とでは考え方に違いがみられる。

建築の専門家は、伝統的な和風住宅の格式性を批判し、また、親しい客を家族のなかに積極的に招き入れるという考え方から、住宅の中心に広い洋室の「広間」や「居間」をもつ住宅を提唱し、ここを家族のだんらんの場であるとともに、親しい客を迎え入れる場としたのである。実際に、上述の「平和記念東京博覧會」、「文化村」の出品作品も、14例中12例までが「居間中心型」住宅であった。

ところが、『婦人之友』誌読者にとって、伝統的和風住宅の格式性の批判は十分に受け

入れられたが、家族のだんらんと接客とを同室でおこなうという考え方は受け入れられなかったようである。

伝統的な和風住宅の格式性を批判し、家族だんらん空間を大切にするという考え方は、『婦人之友』誌読者のなかにも広く普及していたようで、『婦人之友』誌読者の設計した住宅には、家族だんらん空間、なかでも食事の空間を確立し、これを南向きにとろうとするものが多く、昭和時代にはいると「居間」と「茶の間」、「居間」と「食事室」などのかたちで複数の家族だんらん空間をとろうとするものもみられるようになる。洋風にあこがれながらも、南向きの「食事室」にこだわる『婦人之友』誌読者の姿勢は注目に値する。

しかし、『婦人之友』誌読者の設計した住宅には、接客空間をもたないものはほとんどない。専用の接客空間をもっている。それでも、明治時代前期頃までの書院造り住宅のように、「次の間」などをもった広い「座敷」というのではなく、北向きの玄関脇の部屋であるというところにこの時代の特徴がある。洋室の接客空間が多いということもあるのだろうが、接客空間を何よりも重視してというのではなく、むしろ家族だんらんの空間に家族以外の者を入れないための配慮だったと考えられる。親しい客を家族ぐるみで迎えて、家族のだんらん空間のなかに積極的に招き入れるというような社会的な風潮—交友関係—が一般化してはいなかったこと、私室の確立が充分には出来ていなかったことで、家族だんらんの空間がいろいろ雑多な機能を担っていたことなどがその原因だと考えられる。

建築の専門家が提唱した住宅様式は、欧米の小住宅を模範として、これからのあたらしい住宅のあり方を積極的に提案したものであったが、住生活というものは物理的な物のかたちを変えたり、配置の仕方を変えたりするだけではなく、人々の住居観はもちろん生活の仕方—いわゆるライフスタイルまでの見なおしを迫るものであるから、ほんとうに日常生活に密着し、住要求に沿ったもので、生活を歴史の発展方向へすすめるものでなければ普及・定着しない。

「居間中心型」住宅様式は、洋風の郊外型一戸建住宅へのあこがれを体現してはいたが、当時の都市「中流階層」の人々はそれと同じくらい、あるいはそれ以上に家族の日常生活が快適にすごせることを望んでいたのである。

特別に目あたらしい提案があるわけではないが、専門家によるいろいろの提唱を的確に受けとめながらも、それらを家族の日常生活の快適性という視点で取舍選択し、伝統的な住生活のなかからその時代に受けつぐものをみきわめ、提案のなかから現在の自分たちの

生活にとり入れるものを峻別している。そして何よりも、こうしたことを積極的に発言し、経験を交流しながらあたらしい生活を模索し、あたらしい都市住宅像を形成していることに注目したい。日常生活のなかで検証された『婦人之友』誌読者の生活経験の交流が、あたらしい住宅様式を創りだす道につながったのである。